

2008年3月28日
日本銀行

須田審議委員記者会見要旨

2008年3月27日(木)
午後1時30分から約30分
於 宮崎市

(問) 二点、質問します。まず、現在、総裁が空席となっている事態について委員の所見をお聞かせ下さい。2点目ですが、本日の懇談会を終えて宮崎の経済状況についてどのように感じられたのか、印象に残っている議論があればお聞かせ下さい。

(答) 最初の質問についてですが、現在、総裁が欠けているという異例の事態になっております。しかしながら、経済や金融は一日も休むことなく動いておりますので、日本銀行の業務が滞ることは如何なる事情があっても許されないことだと思っています。私自身、政策委員の一員として今まで以上に全力を注いで職務遂行に努めてまいりたいと思っております。

2点目の質問について、まず宮崎県経済の現状についてですが、宮崎県における景気は足許回復の動きがやや鈍っています。すなわち、公共投資や住宅投資が大幅な減少となる中、有効求人倍率が低下傾向を辿るなど、労働需給がやや緩和した状態にあります。こうしたもとで、百貨店やスーパーの売上高が伸び悩むなど、個人消費にやや弱めの動きがみられています。しかしながら、観光関連のこのところの盛り上がりに加え、来年度にかけて改正建築基準法の影響が徐々に薄らぐとみられること等から、緩やかな回復は期待できると思われます。また、本日の懇談会では、宮崎県経済について、「観光産業には活気がみられているが、原材料の価格高騰等から製造業や農業等の幅広い分野で収益に悪影響が出ているほか、個人消費も伸び悩んでいる」とのお話がありました。そうした中で、「新規参入企業の誘致に一層積極的に取り組みたい」、「県下の若くてポテンシャルの高い人材を活かすために、人材形成の場づくりにも努めたい」とか、また、農業についても、「もっと中長期的な視野から世界に目を向けていきたい」といった前向きな声も聞かれ、力強く感じました。私どもとしても、中央銀行の立場から物価安定の

もとでの持続的な成長を実現していくことを促すことによって、当地関係者の皆様のご努力がより大きな実りへと繋がっていくようサポートしてまいりたいと思っております。

（問） 南九州ということで、宮崎県と鹿児島県は、歴史的にみても関係が深いわけですが、そのシナジー効果やその他両県の連携に関して、どのような印象を持たれたか、須田委員および市川鹿児島支店長にお伺いします。

（答） 九州を北と南というかたちで分けて考えるとすれば、両県は同じ経済圏にあると感じております。宮崎については、北側は北九州経済と、一方、南側は南九州経済、鹿児島との結びつきが強いということだと思います。私は、日本経済活性化の一つの方策として、農業が大事であると思っておりますが、農業が非常に重要なパートを占めるという意味では、両県とも同じような状況にあります。農業の生産性を向上させることが日本にとって重要であり、その点について、両県とも同じように期待したい地域であると思っています。

（市川鹿児島支店長） 鹿児島の経済は、回復の動きがやや鈍っているというのが事実であり、景気判断としては宮崎とほぼ似たような状況です。ただ、鹿児島については、一つ明るい話題として、今年是大河ドラマ「篤姫」の舞台になっており、観光関係は大きなイベントを抱えていることもあって、観光については今年は期待が持てます。一口に南九州といっても、定義が難しいのですが、一応、宮崎、鹿児島を南九州と呼ぶとすれば、両県は経済構造が割りと似ており、製造業の比率が10%程度しかなく、農業は5%程度、それ以外は第三次産業等と、どちらかという構造的に製造業が弱い地域であります。全国対比でみて農業のウェイトが非常に高いので、当該分野の経済活動が活発になることは地元経済を大きく成長させる大きな鍵になるかもしれません。特に南九州の経済に関しては、最近の食の安全を巡る消費者の不安といったことが、逆に当地の景気にとって追い風になるという色彩がないわけでもない、とみています。

（問） 宮崎県の東国原知事の人気が続いていますが、同知事の人気が宮崎

県経済にどの程度影響を及ぼしているのか、お伺いします。

（答） 私も東京におりまして、よくテレビ等でお見かけしておりますが、宮崎県を元気にするという意味で非常に貢献されていると思います。本日の懇談会で一番印象に残ったことですが、東国原知事が知事に就任された以降、県民が県政に対する関心を非常に強めたというお話がありました。県庁へ足を運んだり、議会を傍聴する県民が非常に増えたということでした。こうした関心の高まりは、地方がこれから独立して生きていくための必須条件であるとは私は思っておりますので、非常に素晴らしいことだと思います。

（問） 二点伺います。本日の挨拶要旨の中で宮崎県についてお話されている部分で「全国では国際金融資本市場の不安定化等を背景に沈滞ムードが広がっており、まさに『どげんかせんといかん』状況です。」とおっしゃっていますが、こういった状況において、日本銀行自体がまさに「どげんかせんといかん」状況ではないのかどうかお聞かせ下さい。もう一点は、金融政策についてお話されている部分についてお伺いします。挨拶要旨の脚注で「ある程度デフレリスクが顕在化した段階では、通常の政策ルールを逸脱して思い切った金利の引き下げを行うという中央銀行の行動方針を表明し、そのことについて市場参加者の信頼を得る」と述べている日本銀行の論文を引用し、須田委員ご自身はその考え方に近いとおっしゃっていますが、日銀が今、思い切った金利の引き下げを行うといっても、金利は 0.5% しかないわけであり、こういった状況で市場参加者の信頼を得ることができるのかどうか。むしろ、金利が 0.5% しかないために日銀は金利引き下げを渋るのではないか、といった見方も市場にはあるわけですが、こういった見方についてはどのようにお考えでしょうか。

（答） 今、日本銀行がやることというのは、国際金融資本市場が非常に不安定化している中で、まず、その不安定化の理由をしっかりと把握し、それが何を意味するのかを情勢判断することだと私自身は考えております。それと同時に、日本は元々サブプライム住宅ローン問題に直接関与しているわけではないので、市場における不安感や米欧等に比べて低い水準になっても仕方がないと思っております。従って、欧米の中央銀行の方々としっか

りと情報共有して、この問題がどの程度世界経済にとって大変な問題かを把握し、それが各国経済にどれだけ影響を与えるのか、そしてそれが日本経済にどのように波及してくるのかということも含めて、今はしっかりと情勢判断する時期だと思っています。リスクファクターは色々ありますが、こうした状況下では、どうしても市場は悲観的な方向へ傾くことがありますので、私としては、色々とダウンサイドリスクがある一方で、市場に織り込まれていたことがその通りにならないという意味ではアップサイドリスクもあることを頭に置きながら見ていきたいと思っています。

金融政策のスタンスですが、私は今のような状況にあって、実体経済ないし物価情勢が堅調なもとで、フォワードルッキングだからということで、先行きを想定してアグレッシブに緩和政策をとるということではなく

それをやってしまうと、実体経済が悪くなったときに、より一層緩和が織り込まれてしまう可能性もあるので、実際にある程度その兆候がでてきた時にかなり思い切った処置をとっていくということを市場と共有しておくことが大事だと思っています。緩和度合いをもっと高めなくてはいけないといった時に、「もう0.5%しかないではないか」という考え方は私はとっておりません。私は、元々「今、金融政策の糊代はあまりない」という考え方には与していません。緩和政策をとらなくてはいけない状況になった時には、様々なことを考えていきたいと思っています。具体的なことはその時になってみないとわかりませんが、その時の状況に合わせて、どうしたら上手く緩和度合いを高められるかを工夫しながら、考えながらやっていくということは信じて頂いて良いのではないかとと思っています。

（問） 一つだけ追加でお聞きしたいのですが、信じてほしいとおっしゃる気持ちもわかるのですが、ただ思い切ったことというのは0.5%の金利以外にどのようなことがあるのでしょうか。あまり想像つかないのですが。

（答） 私どもはずっとこれまで、非常にデフレスパイラルに陥るリスクがある状況のもとで様々なことをやってきました。それを参考にしながら様々なことが考えられると思っています。具体的にどうこうということではなく、また、その時になってみないとどういうものが良いかは申し上げられませんが、過去の経験は今後、何かやらなくてはならない時に参考になると思って

います。

（問） 本日の挨拶要旨の中にも、「米国の金融機関の資本不足問題がここまで深刻化してきたことは想定外の展開であった」という言葉がありましたが、最近、米国の金融機関に対する公的資金の活用、注入論など、色々な意見が出ておりますが、この点について須田委員のお考えをお聞かせ下さい。

（答） 今のような状況になった時に、日本の経験も踏まえれば自己資本を充実させていかななくてはいけないということはその通りだと思っています。ただ、それをどういうかたちでやっていくかに関しては、それぞれの国のセーフティネットの考え方もあると思いますし、公的資金と言わなくても例えば投資ファンドみたいなところが資金を出すという可能性もありますので、それはそれぞれの国がそれぞれで判断していくことだと思っています。この問題は元々、公的資金を入れるかどうかということ以前に、どうやってこの金融機関の問題を解決していくかということを経済シナリオを通じて共有し、それをその通りに実現していくことが私は大事だと思っています。何か対策が出た後、色々なことがあってそれが実現しなくなったということがないように、計画されたことがきちんと実現されていくことを期待していきたいと思っています。

（問） 挨拶要旨の中で、「安心安全で品質の高い日本の農産物に対する世界的なニーズも拡大していくと予想されます。こうした潜在的なニーズを掘り起こしていけば、日本の農業は、非常に将来性の高い産業なのではないか」といったお話がありました。急激な円高で海外輸出の面では製造業全般が非常に苦しい立場にあると思います。今後そのような状況が長く続くかどうかわかりませんが、そうした中で、農業がどのように潜在的なニーズを掘り起こしていくべきか、お伺いします。

（答） 私は、もちろん、農業のひとつの方向として輸出ということが考えられると思います。隣に非常に巨大で、人口が多く、生活レベルが上がるに従って安全を求める多数の国民がいる国もありますので、そういう意味では輸出して生産を伸ばしていくチャンスはかなり大きいと思っています。それ

とともに、私が日本の農業に期待することは、例えば国のお金が入ってどうか生きていくのではなくて、せめて自立して、輸出はしなくとも、補助金のない中でしっかりと自分達で生活できるだけのものは稼ぎ出していけるということがまず大事だと思っています。そういう意味では、やっていけないのではないかと思います。

（問） 挨拶要旨の中でインフレリスクについても触れられていたと思います。最近、食品価格とか生活必需品の価格が上がっていて、それがインフレリスクを高める一方で、消費者のマインドを冷やすという意味で消費に悪影響を及ぼすという議論がありますが、そのバランスをどうみていけばいいのか、今後、食料品等一次産品の価格が継続的に上がった場合、そのバランスをどうみるべきか、また、それが金融政策運営に与える影響について、もう少し詳しくご説明願います。

（答） 私自身は、特に食料品の価格については、これから先、代替エネルギーという部分もありますし、また、生活水準が上がる国民が海外にたくさんいる中では、上昇していく可能性があると思っています。そういう意味では、生活関連財の価格は今後も上昇する一方、その他の財・サービスの価格が余り上がらないという状況で、一般ないしコアの消費者物価はあまり上がらない、しかし生活関連財は上がっていくという状況が続く可能性がある程度はあると思っています。

そうした中で、金融政策をどうするかということに関してですが、まずインフレ予想という部分については、生活に関わる国民は生活関連財の価格でインフレ予想を立てますので、国民のインフレ予想は一般物価をみているマーケットの人達よりも高いというギャップが存在します。そうした中で金融政策をやることの難しさを、今回ＢＯＥの例を挙げてお示ししました。つまり、インフレのターゲットは守っていても、生活関連財の価格が上がっていると、それに対して中央銀行がちゃんと仕事をしているという国民の思いがだんだんと下がっていくことが示されているわけです。そしてそれに対しては、今回、日本銀行のスタッフの分析例を挙げましたが、やはり中央銀行がしっかりと金融政策について物価安定を持続していくのだということを示すこと、生活関連財の価格の上昇ペースがこれから先どんどん上がって、

インフレが高まっていくと思わなくて良いように、常に語りかけて、私どもは物価の安定を維持しますと語っていくことによって、国民に不安感をもたらしてマインドを下げ、消費を下げるという事態を減らすことができるのではないかと考えています。

それから、基本的には金融政策を考える上では振れを均しながら、ということでコアの消費者物価をみていますが、いま申し上げたように、一次産品価格がトレンドをもっていくかもしれないという時には、コアだけを見るのではなくて、総合もみながら、あるいはコアコアもみながら、トレンド、基調はどこにあるのかということをしっかり判断しながら政策をやらないと、経済全体でみた真のインフレ率をみながら政策をするということができなくなってしまいますので、気を付けてやっていきたいと思っています。

（問） 最後に、本日の懇談会も含めて、宮崎全体の印象をお聞かせ下さい。

（答） 今回仕事でまいりまして、飛行場に降りた時の明るさと青い空、また、「道々に花がたくさん咲いていて、いいな」というのが第一印象です。それと、随分前、もう何十年も前に宮崎に来た時には、「昔は新婚旅行のメッカだったのに」と何か落ち込んでいる姿を見たことがあったのですが、それから比べると今は、「頑張るぞ」という元気さや気持ちが、地元の方々、行政の方々からも伝わってきましたので、是非頑張ってもらいたいと思いました。

以 上